



2026（令和8）年6月29日発行  
（編集）愛光本部  
（TEL）043-484-6391  
（HP）<https://www.rc-aikoh.or.jp/>

新緑の季節を迎え、各現場では日々の支援に加え、利用者の健康維持に向けた取り組みや安全確保のための訓練が精力的に行われています。職員の知識や技術を磨く体験型の研修、業務の効率化を目指した新たなシステムの導入準備など、より質の高い環境づくりへの模索も続いています。また、地域の方々を対象とした講座の実施や、世代を超えた美化活動、再開された交流行事などを通じて、地域社会との結びつきをより一層深める一ヶ月となりました。今後も一人ひとりの尊厳や変化に寄り添い、安心して無理のない、温かい支援の継続に向けて日々邁進してまいります。

#### □事業経過など（2026.5.1～）

1	金	辞令交付式
7	木	辞令交付/採用後1年面接
8	金	5S研修
11	月	コヒューマントレーニング
12	火	業務執行会議
13	水	人事ワーキング会議
14	木	救急救命講習会
17	日	愛光家族協議会総会
18	月	佐倉圏域事業部実績会議
19	火	衛生委員会・感染症対策委員会/監事監査
20	水	地域食堂ともいき
21	木	高齢者福祉事業部実績会議/監事監査
23	土	声の花束
26	火	業務執行会議/監事監査/後援会運営委員会/灯台カフェ（よもぎの園）
27	水	障害者支援事業部実績会議/地域福祉事業部実績会議/財務7°レポート
28	木	経営戦略会議/嚙下摂食研修

## ■ 月報から

### □ 学校挨拶まわり（本部）

新年度が始まり、新卒採用に向けて学校への挨拶まわりを始めた。これは単なる形式的な挨拶に留まらず、各学校との信頼関係を強化し、最新の採用市場の動向や学生ニーズを理解するための重要な活動でもある。少子化や多様化する学生の価値観など、新卒採用は年々難易度を増しているが、この初期段階の活動が今後の説明会やインターンシップなどの選考プロセスへ繋がるよう、学校と密な連携を通じて候補者との縁を繋ぎたいと考えている。

（総務課長 宮本 典昭）

### □ 健康診断（ルミエール）

毎年この時期に利用者の健康診断が行われ、利用者と職員の共同作業となる。ここ数年の変化として、利用者の高齢化が進み、以前より検査を行いやすくなったことが挙げられる。自閉症の若い利用者は採血を怖がる傾向があり、針を扱う医療従事者や、そばで利用者を支える職員にとっては非常に危険を伴う作業である。現在も採血時には細心の注意を払い、すべての関係者が事故防止に努め、利用者をしっかり支えている。それでも以前と比較すると採血は行いやすくなっており、利用者の安全確保につながっている。

健康診断は採血だけでなく、検尿、胸部レントゲン、心電図検査も含まれる。特に身体を静止する必要があるレントゲンや心電図検査も難易度が高く、多くの利用者にとって負担の大きい検査である。心電図測定が困難な利用者も多いが、可能な限り実施できるよう取り組んでいる。ここでもスローガンである「一歩先に行く支援」を意識し、利用者の心臓や肺の状態を把握することで、より適切な支援や対応につなげていきたい。

また、今年度からは採血に代表される医療行為における身体抑制について、身体拘束同意書を取得することとし、家族会にて説明を行い同意を得た。今後も利用者の健康維持およびQOLの向上を目指し、立ち止まることなく取り組んでいきたい。

（ルミエール課長 原 宏之）

### □ 福祉用具の体験（めいわ）

5月の職員会議において、高齢期支援係企画の研修として、優ケア様のご協力のもと、〔福祉用具体験研修〕を実施した。

研修に先立ち、職員を対象に日頃の介護業務において困っていることや負担に感じていること、興味のある福祉用具等についてアンケートを実施した。優ケア様にはその内容を踏まえ、様々な福祉用具や最新機器をご用意いただいた。

研修では、職員が実際に福祉用具に触れたり、クッションに横になって使用感を体験したりするほか、電動移乗リフトに実際に乗車するなど、体験型の内容となった。参加した職員からは、「カタログやインターネットで見ただけでは分からない使い心地や利便性を実感できた」との声が聞かれた。

めいわにおいても転倒による骨折事故は発生しており、事故予防や被害軽減につながる福祉用具について実際に見て学ぶことは大変有意義であった。また、移乗介助は利用者だけでなく職員の身体的負担も大きい業務である。リフトやスライドシート等を体験することで、安全性の向上と介助負担の軽減について具体的に検討する機会となった。

さらに、これまで知らなかった機能を備えた車いす等にも触れることができ、現時点では

対象となる利用者はいないものの、今後想定される支援課題への備えとして貴重な学びとなった。

日々の業務に追われる中で、最新の福祉用具に関する情報に触れる機会は決して多くない。しかしながら、利用者の安全確保や生活の質の向上、さらには職員の負担軽減を図るうえで、福祉用具に関する知識を継続的に更新していくことは重要である。本研修は、その必要性を改めて認識する機会となった。今後も利用者、職員双方にとって安心で無理のない支援が継続できるよう、知識や技術の向上に努めていきたい。

(めいわ課長 日野 史生)

## □ リホープに帰ってえ (リホープ)

令和8年5月19日19時05分、末期癌により「リホープに帰ってえ」という強い希望を抱いていたT氏が永眠した。3月20日に看取り前提で退院した際、医師からは「長くても1ヶ月程度」との見解が示されていたが、実際には住み慣れた当施設で約2ヶ月間にわたり穏やかな時間を過ごすことができた。懸念された痛みも通常処方範囲でコントロールされ、ご本人も苦しむことなく最期を迎えられたことは、亡くなられた際の安らかな表情が物語っている。

経過として、4月下旬までは好物を少量ずつ召し上がっていたが、GW明けから状態が低下し水分中心となった。5月中旬には排尿量も減り、全体的にも一段階弱まる変化もみられたが、5月17日の夜中には「酒を飲みてえ」と力強い訴えが数回あり、朝になって日本酒を急いで買いに行き、40ccほどを嗜まれる場面もあった。逝去の数時間前まで職員の声掛けに頷いて応えられ、最期は呼吸の変化に伴い担当職員がベッド横で付き添った。死を目前にした様子に怖さや戸惑いを感じたかもしれないが、休みや帰宅後の職員も次々と駆けつけ、看護師を含む多くのスタッフに見守られる形での旅立ちとなった。特養でも、このように最後の場面を長い時間付き添って看取れるケースはなかなかない。施設にとって極めて大きな経験(財産)となった。

5月25日、支援センターでお別れ会(葬儀)を行い、多くの利用者・職員が参列した。5月28日に火葬を終え、6月15日にT氏のご両親が納められているお墓に納骨される予定である。

(リホープ副施設長 麻生 知明)

## □ 寄り添う支援 (根郷通所センター)

昨年度新規に入所した利用者において、再び暴力行為によるトラブルが発生し、今回で2回目となった。前回のトラブル発生時には、「再度暴力行為が認められた場合は退所とする」旨を本人へ説明し、同意を得ていたことから、当初は当該取り決めに基づき退所手続きを進める方針であった。しかし、現場職員からは、当該条件の周知が十分でなかった点や、「継続的に寄り添うこと自体が支援である」との意見が示され、今回については退所を見送ることとなった。

一連の動きを通して、我々は「寄り添う支援」という判断の背景に、支援者側の納得や安心を優先する側面がなかったかについて、改めて検証する必要があると考えている。また、支援のあり方が結果として本人の社会経験の機会や生活環境の選択肢を狭めることにつながっていなかったかという観点に立ち、支援の適切さを問い直す必要もあるだろう。

暴力行為後の本人との面談では、「根郷通所センターに戻って仕事をしたい、楽しいことをしたい」との発言があったとのことである。この思いは尊重されるべきである一方で、本

人の障害の程度および事業所との適合性についても慎重な検討が必要である。特別支援学校を卒業したばかりで、生活経験や選択の幅が十分に形成されていない段階において、この事業所を「自分に合った場所」と決めてしまう危うさもあり、本人にとってより適切な環境を見極めるうえにおいて、他の事業所での経験を積むことが必要である。

これを踏まえ、今後同様の暴力行為が再発した場合には、単なる問題行動への対応としてではなく、本人にとってより適切な環境や新たな経験の機会を広げるという視点から、事前の取り決めに基づき退所対応を行う方針とする。

また、今後、暴力行為の再発がなく、日中活動への安定した参加が継続して確認される場合においても、本人が他事業所での経験機会を得ることを目的とした退所について、前向きに検討することとする。これらの方針については、本人および家族ともに合意している。

その上で、複数の事業所での経験を経た結果として、最終的に根郷通所センターでの利用が本人にとって安心できる環境であり、かつ本人の意思に基づく利用継続の希望が確認できた場合には、改めて受け入れを行い、安定した利用継続に向けた支援を行うこととする。

(根郷通所センター所長 菊地 暁生)

#### □ 計画的に作業を進めるには（よもぎの園）

大型連休がある5月は航空機関連の作業が必然的に増えてくる。旅行シーズンのため多くの人たちが航空機を利用するので、毎年、嬉しい悲鳴が聞こえる時期でもある。今年度も同様に順調に仕事をいただけたが、他の作業についても平均的に仕事をいただけているのでバランスよく進めなければならない。どこかの作業に力点を置きすぎると全体のバランスが崩れてしまうからである。各作業とも進捗を職員間で共有し、人数配置を考えながら生産をしていく必要があるので、職員は各フロアの状況を把握しながら協力体制を築いてくれた。忙しい時にこそチーム力が問われてくるので、今年度もさらなるチーム力の深化を目指したい。

(よもぎの園 近藤 真一)

#### □ 入院者訪問支援事業の実際（ワークショップかぶらぎ）

昨年6月より千葉県においても入院者訪問支援事業の委託事業者が決まり、訪問員の養成と、実際の訪問支援が開始されている。この事業の目的は精神科入院患者の退院意欲の向上や退院後のサポートイメージを補強することにある。また訪問員としてピアサポーターが参加できる事業であることが目玉である。

事業開始から約1年が経過し、これまで16件の訪問があり、その3分の1にピアサポーターが参加したとのことである。すべての病院で活動できているわけではない状況であるが、国の後押しを受けて、少しずつ精神科病院における社会的入院者の減少につながることを願う。

(ワークショップかぶらぎ 宮部 和樹)

#### □ ホームでの生活を希望しつつ、時折でてくる「家に帰りたい」気持ち

(宮前の家)

入居者との個別面談を実施した。面談でグループホームでの生活状況を確認したところ、各自の生活が定着している様子がうかがえた。一方で、2名の入居者から「たまに家に帰りたいときがある」「弟が会いに来ないので帰りたい」との訴えがあった。しかし、最終的にはいずれもグループホームでの生活を希望している。入居時に設定した目標については、今後取り組むべき課題が多く残されている。これまでは「グループホームの生活に慣れるこ

と」を主な目標として支援を行ってきたが、今後は「自分でできることを増やす段階」へと支援の方向性を移行する必要があると考えている。現在は、職員の担当制を導入し、アセスメントの見直しを進めながら、個別支援計画に沿った支援の充実を図っている段階である。

(宮前の家 高橋 健)

## □ FAXが消えていく日、移行期の整理されていく現場（はちす苑）

今月は、介護現場のICT化を進めるため、厚生労働省が普及を進めているケアプランデータ連携システムについて学び、導入に向けた準備を行った。

ケアプランデータ連携システムとは、居宅介護支援事業所と介護サービス事業所の間で、ケアプランや提供票などの情報をパソコン上でやり取りできる仕組みである。これまでの業務では、FAXや郵送で書類を送付し、届いた書類を確認した上で再度入力する作業が必要であった。そのため、印刷、送信、確認、保管、入力など多くの手間が発生していた。

また、転記ミスや確認漏れのリスクもあり、業務の正確性という面でも課題があった。特に月末や月初は書類のやり取りが集中し、事務作業が重なることで業務負担が大きくなる傾向があることがわかった。

ケアプランデータ連携システムを活用することで、FAX送信や郵送といった作業が減り、書類作成や送付準備にかかる時間の短縮が期待される。例えば、印刷や封入作業が不要となり、1件ごとの対応時間を削減できる。また、データをそのまま活用できるため再入力の手間が減り、転記ミスの防止にもつながる。さらに、書類到着を待つ必要がなくなり、情報共有のスピードが向上することで、必要な対応を早く行うことができるようになる。

一方で、他事業所の例として、導入初期に操作に慣れず、誤って別の利用者の画面を開いてしまい、一瞬誰の情報か分からなくなる混乱があったと聞く。紙であればファイルですぐ確認できるが、画面操作では一覧表示が多く、見間違いが起こりやすい状況である。

また別の事業所では、FAXがなくなったことで「送った・届いていない」の確認電話が減り、最初は静かすぎて不安になったという話もあった。しかし慣れると、その分の時間を他業務に回すことができ、効率化を実感できるようになったとのことである。

さらに、紙中心の業務に慣れてきた職員が、最初は書類を探すのに時間がかかっていたが、次第に検索機能を使いこなし、最終的には「紙より早い」と話すようになった事例もあった。このようにICT化は、初期には戸惑いがあるものの、慣れることで業務の考え方や進め方そのものが変化していくものである。

今後は紙中心の管理からデータ中心の管理へ移行していくため、新しい仕組みに慣れていくことが必要である。長年の業務習慣を変えることは容易ではないが、繰り返し使用することで理解と習熟が進むと考える。

導入準備ではシステム内容や操作方法の確認を行い、職員間で情報共有しながら理解を深めている段階である。不明点はその都度確認し、無理なく習得できるよう取り組んでいる。

今後はデータ活用を進め、事務作業の削減と情報共有の迅速化を図り、より利用者支援に時間を充てられる体制づくりを目指していく考えである。

最後に、紙の方が安心だと言いながら生成AIで検索している職員の姿があり、ICT化の移行期らしい一場面であった。

(はちす苑課長 柵 直芳)

### □ 藤治台わくわく体操会出前講座（佐倉市南部地域包括支援センター）

21日（木）、地域の住民主体の体操会「藤治台わくわく体操会」にて出前講座を行った。毎年定期的に出前講座の依頼を受けており、今回は「エンディングノートや断捨離について話をしてほしい」と依頼があった。高齢者見守り協力事業者である明治安田生命に講師を依頼し、エンディングノートの書き方について講義していただいた。実際のエンディングノートを見ながら書き方について説明をしていただいた。「こういう時はこうしてほしい」という希望が形で残っていることで、万が一何かあった場合でもご家族にとって意思決定の助けになると説明を受けた。

断捨離については、包括職員が講義を行った。片付けとは異なり、不要な物を断ち切り物への執着心をなくすことで身軽で快適な生活や人生を手に入れようとする考え方であることと、実際の手順やポイントについて伝えた。どちらもこれからの人生をより豊かなものにする手段であるため、前向きに終活を考えてもらうきっかけになればと思っている。

（佐倉市南部地域包括支援センター 森 由美子）

### □ ゴミ0運動（クリーン大作戦）（佐倉市南部児童センター）

毎年恒例となった「クリーン大作戦」。今年もまちづくり協議会の皆さん、地域福祉センターの利用者の皆さん、そしてスマイルクラブ（小中学生ボランティアクラブ）の子どもたちの三つの団体によって開催された。5月とは思えないほど今年も暑い一日となり、体調に気を配りながらの実施となった。

今年スマイルクラブには新しいメンバーも加わり、この日も朝からワシャワシャと落ち着きのない様子であった。「大丈夫かな」と心配していたが、作業が始まるとキビキビと動き出す。いつもながら、子どもたちの意識の高さには驚かされる。

ゴミ拾いの最中、草がうっそうと茂る道端には、たばこの吸い殻がたくさん落ちていた。子どもたちと「ひどいねえ、誰がこんなところに捨てるんだろうね。火事になったら怖いよね」などと話しながら拾い集めた。また、ストロー付きの紙パックや大きな菓子の包装が無造作に捨てられ、マナーの欠如を感じさせる光景が散見された。子どもたちもその様子を見て、何かしら感じ取ったようである。

クリーン大作戦は、町をきれいにすることが目的である。しかし、活動を通して、ゴミを捨てた人の気持ちやその背景にまで思いを巡らせることがある。「ゴミはゴミ箱へ」という言葉は昔から言われ続けているが、このような取り組みに参加することで、言葉以上に“自ら行動しよう”という気持ちが自然と芽生えるきっかけになるのではないかと感じた。

（佐倉市南部児童センター 吉田 知加子）

### □ 不審者対応訓練（学童保育所）

前日に不審者対応についての〇×クイズを行い、どう行動するとよいかをみんなで確認した。みんな学校や幼稚園、保育園などでも話を聞いてきているので、スムーズに話を聞くことができた。その中には知らないことなどもあり、みんなで意見を出し合った。当日の訓練では、職員の話をよく聞いて、静かに落ち着いて行動することができた。

一方で、カーテンを開けて外をのぞいたり、お友達と話してしまったりする児童の姿も見られた。注意を促すことで、「なぜその行動が危険なのか」をみんなで改めて考える機会となった。児童たちは真剣に話を聞き、訓練に取り組んでいた。

職員にとっても、役割や動きの確認を行うことができた。本番(実戦)は来ないに越したことはないが、備えは続ける。  
(学童保育所 齋藤 理江)

#### □ ふれあいサロン南部（佐倉市南部地域福祉センター）

5月30日（土）、佐倉市のボランティア団体「大昭会」が1年3か月ぶりに来所した。これまでA棟の大広間で盛大に演じてもらっていたが、今年からはB棟の研修室での開催となった。各メンバーがそれぞれ出し物を披露するためスペースが心配されたが、来所した近隣の参加者ととも、楽しい時間を過ごすことができた。

内容は、アコーディオンの伴奏のもと、皆で歌う時間があり、「茶摘み」や「四季の歌」を歌った。その他、紙芝居による落語の「寿限無」では、あの長い言葉を皆で発声した。そして、ヨーロッパ地方で生まれたパンフルートという、天然素材で作られた笛が何十本と組み合わされた楽器で見事に演奏してくれた。手で持てる大きさのパイプオルガンの管のような笛である。途中で、センターの職員対大昭会の演者たちとの「野球拳」での交流もあった。会場全体で、あの独特な踊りをして、おおいに盛り上がった。大昭会は、来館者と年齢層がほぼ同じなため、センターにはぴったりのイベントになっている。

(佐倉市南部地域福祉センター 青山 秀人)